

## 復興支援フォーラムニュース No. 78

(URL <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tkonno/FK-forum.html>)

<事務連絡先> 今野順夫 ([tkonno67@gmail.com](mailto:tkonno67@gmail.com))

### 第75回ふくしま復興支援フォーラムでのご意見等

10月9日、第75回ふくしま復興支援フォーラムを開催しました。

報告者は、高木亨氏（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授）で、テーマは「過去の災害の経験から見えること～2000年三宅島雄山噴火の経験・水俣58年間の経験」でした。25人が参加し活発な質疑応答がありましたが、会場で提出されたご意見等は以下の通りです。

~~~~~

★水俣病の場合も、健康被害に対する国、県など公的な施策が問題です。病気に対する治療費、生活としての生涯年金、そして予防としての健康診断費が重要です。健診については、県民全体に対象を広げる必要があります。補償などの一時金ではなく、永続的な検診への施策が必要です。(M. T)

★水俣病の問題、公害からその原因となる物を拡散させない事、弱者である被害者を守る事、そのように見つめるべきか、そのために全体を正しく理解することが重要と感じました。(Y. M)

★水俣病の有機水銀の汚染が、今では東京湾の汚染より少ないという事が印象的だった。一度ついた悪いイメージを払拭するのは非常に難しい事を痛感しました。また水俣病の認定の状況とそれに伴う差別の構造が非常に複雑な問題であることがわかりました。今回のお話がこれからの福島の復興にどうつなげられるか考えていきたいです。(K. Y)

★話を聞いて、福島と水俣の類似点を感じた。ただ、チェルノブイリの場合もそうだが、福島と水俣と同じところ、違うところは、詳しく調査しなければならないだろう。(Y. I)

★津波、火山のような同一の土地に被災～復興の過程が繰り返ループし、経験が蓄積される災害と異なり、公害、事故は少なくとも同一の土地では一周限り、だからこそ類似と相違を慎重に見つめながら、他の経験を学ぶことが重要だと感じた。(D. Y)

★日本中（世界中）には問題が山積みですが、自分自身が考え、自分のとなりの人と一緒に考え、考えて行動する輪を広げていくしかない。目をそむけないこと。(H. S)

★被災と復興。半世紀たっても、水俣はいまだ終息せず。考えさせられました。(Y. M)

★三宅島、水俣と複数例をとりあげることによって、ややまとまりがない報告になったような印象を受けたが、個々には大きい示唆など、考えさせる論点が多く有益であった。(S. I)

★原発災害を含む福島が負っている現状を、相対化してみる視点を学んだ。(S. M)

★過疎地の災害は、地域の課題をとりわけ顕在化させる。それが弱者に重くのしかかる構図が、今回の災害比較であらためて浮き彫りになった。(Y. T)

★様々な側面があることを学び、語るときの「危うさ」を考えさせられました。次のステップにつなげられる水俣と福島の比較だったと思う。違う点が学ぶ事ができました。(N. H)

★水俣との比較が勉強になった。ありがとうございました。

★いくつかの角度から解析されて興味深いお話でした。福島との比較をより深くされることを期待しています。

## 原発事故後のリスクコントロール教育実践から

桜の聖母短期大学 二瓶由美子

### 1. 3.11以降の葛藤の日々を振り返って

- ・入学辞退者ゼロの2011年5月入学式 卒業式をせずに巣立った学生たちと自宅待機の在学生

### 2. 3年を振り返る在學生たちの声

- ・別紙参照

### 3. 福島県の現状と女性たちの声

- ・「ふくしま復興のあゆみ」を参考に

### 4. 復興の鍵は情報提供と教育

#### チェルノブイリ視察団に加わって ①ベラルーシ共和国

「ロシア・ベラルーシ チェルノブイリ事故問題情報センター」

ベラルーシ支部長 トラフィムチク・ゾーヤ・イワノブナ氏

ソビエト政権時代の情報不足がもたらしたもの

- ☞ 噂で広まった間違った情報が健康被害を拡大し、農業生産に悪影響を与えた。
- ☞ 現在、チェルノブイリ関連の事業に関する情報公開が非常に重要である。  
なぜなら、100万人以上のベラルーシ人がまだ汚染地域に住んでいる。  
(いまだにベラルーシには立ち入り禁止の札が立っている場所が非常にたくさんある)  
子どもたちに対するステレオタイプもいまだ根強く残っている。  
(汚染地域の住民には、実際に事故を経験した人もいれば、過去の歴史的事実でしかない人もいる)
- ☞ 基本的に政府で汚染地域に関する様々な防護措置を行っている。

住民への正しい情報提供・国際的課題としてのリスクコントロール

#### 現在の具体的な取り組み (特に汚染された3つの州の情報センターの役割)

- ☞ 住民の生活に役立つ食料品などの正しい情報を伝えていくことが重要課題
- ☞ 若者によるポジティブキャンペーン
- ☞ 住民の証言も集めている
- ☞ 緊急事態省のインターネットサイトには幅広い情報を集約
- ・原発事故に対処できる情報を集める
- ・住民感情と精神面での方法論を確立する
- ・世界全体で困難を乗り越える機運を高める

### 5. メモリアルする意義

②ウクライナ共和国 チェルノブイリ博物館

☞ フクシマに寄せる思い

☞ 30km ゾーンの「失われた町や村」の名を書いたプレート

#### アンナ・カラレフスカ副館長による説明

- ・博物館は1992年に消火活動に当たった消防署員と兵士たちのメモリアルのために設立。
- ・事故当時、原発で176人が仕事をしていて、22人が致死量の放射線を浴びた。
- ・276人がモスクワの第6病院に送られた。
- ・当時の展示品は約200だったが、その後増加し、現在に至っている。
- ・モスクワでは、4月30日に放射線の測定が報告されていたが、メーデーは実行された。
- ・情報の遅れが多くの人々を被ばくさせた。
- ・原発作業員（リクビダートル）は延べ約60万人で、76の民族の人が参加していた。
- ・石棺建設には90万人が半年間従事した。
- ・実におびただしい数の人々が放射能による被害を受けている。
- ・事故による被災者は、難民や処理作業員を含め350万人に及んだ。
- ・2000年に3号炉が最終的にストップしたが、事故後も多くの人が働いた。

#### 懇談会出席者

- ・コルズン氏（44年間内部被ばくの研究を行い、現在は食品衛生の研究所）
- ・ドゥン・オクサーナ氏（イワンコフにある総合病院長で病気の子どもたちの診療にあたる）
- ・バンダジェフスキー氏（ゴメリ国立医科大学創設時1990の学長、被災者の健康の研究を行なってベラルーシ政府と対立しウクライナへ国外追放された経験を持ち、後環境健康分析センターを作った。）
- ・ナタリア・ドゥババイ氏（人口問題とチェルノブイリの問題の関連について研究）
- ・カドゥン・オクサーナ氏（1986年に看護師として病院で働き、その後医学大学を卒業し医師となる）

#### 博物館の展示を見学

- ・徐々に展示物が増える館内は祈りの場でもあった。
- ・マリア像やキリストが掲げられ、人々が祈りのなかにいることが理解された。
- ・過去を展示することで、過去の苦しい経験や失われたものを悼んで祈り、未来を考える。
- ・チェルノブイリ博物館の意義は、原発事故そのもののメモリアルとしてだけでなく、亡くなった人々、苦しみと不安を味わった人々の経験を伝えることにある。
- ・悲惨な経験は語り続けられなければならない。
- ・世代をつないで歴史的な大惨事を伝え続けることは、情報と教育という視点からも重要。

#### チェルノブイリ原発事故と福島第一原子力発電所事故との違いを踏まえたうえで情報と教育に関する提言

☞ リスクコントロール教育

☞ 社会科学分野における原子力研究

☞ 教育の根本的な見直し

課題発見・課題解決型教育

持続発展教育（ESD）

## 6. リスクコントロール教育の試み

桜の聖母短期大学のキャンパス広場（かつては短大校舎が建てられていたが、現在はキャンパス広場として活用、福島市の中心に位置する信夫山ふもと近く）の空間線量計は、2012年末0.4 $\mu$ シーベルト前後を記録。ときとして、0.5 $\mu$ シーベルトを記録し、これは信夫山に残留する放射性物質の影響。 → 学生：空間線量計を意識する習慣はない。

学生の健康を守り、安心を担保するために、毎月学内各所を定期的に計測しHPに更新している学内各所の放射線量：2012年12月27日の測定値は、屋外では、学生通用門：0.24（平均値  $\mu$ シーベルト/hour 地上100cm における測定）、学生自転車置き場：0.35、バス停：0.62であった。

屋内は、学生ホール（1F）：0.05、キャリア相談室（2F）：0.04、調理実習室（3F）：0.03、4F教室：0.04、5F教室：0.05、6Fエレベーターホール：0.04 → 学生：閲覧する習慣はない。

2011年4月20日、文部科学省は、国際放射線防護委員会（ICRP）の基準を踏まえ、年間20mシーベルトの暫定基準値を通知 → 市民団体などから猛反発（年間20mシーベルトは、屋外での放射線量が1時間当たり3.8 $\mu$ シーベルトに相当し、これでは放射線の影響を受けやすい子どもたちを守れない） → 文部科学省は5月27日「今年度、年間1mシーベルト以下を目指す」とする新たな目標を設定

学生自身がコミュニケーションするために

- 事故そのものの実態を正確に知ることを前提
- 事故による放射性物質飛散の実状を把握する
- 内部被ばくについて理解し、回避する方法を熟知する
- 原発立地の背景を財政学、経済学の視点から歴史的に学んでおく
- 安全神話がどう作られてきたかを検証しつつ、科学と人間の関係について見極める

限られた予算や時間的制約のなかでできることとして考えたのは、福島県の復興のために福島大学に設置された「うつくしまふくしま未来支援センター」の専門家たちの研究を活用することだった。2012年度の共通教育科目「現代社会論」で、「環境社会学」「農業経済学」「被災者支援」の分野から、福島県の課題を学ぶシラバスを作成。「原子力災害と復興」「原子力と環境問題」「原発安全神話」「被災者支援」というテーマを取り入れた。「性暴力被害者支援」講座も入れた。

## 7. 分断 —ここに生きる選択と避難する選択のはざまで—

- ・女性の生活に何が起きたのか
- ・子どもたちの暮らしはどう変化したのか

## 8. 復興学としての「福島学」の取り組み

桜の聖母短期大学1年生（震災当時は中学3年生）の声

### 生活科学科食物栄養専攻 A さん

私は震災前、福島に原発があることさえ知らず、何が危ないかも気にも留めていなかった。しかし、事故が起きて様々な情報が飛び交い、間違った情報や不安をあおるような情報に対し、正しい知識を得ようと努力してきた。将来、心無い言葉を投げつけられても、正しい知識があれば周囲や自分を守れないのだと痛感したからだ。事故前の自分の無知を恥じ、知識を得て、誰かの手を差し伸べられる人間になりたい。しかし、震災後のボランティアや原発反対署名活

動を経験するなかで、無力さも感じた。

#### 生活科学科福祉こども専攻 Bさん

甲状腺の検査には、2度行った。その後も定期的に検査の通知が来るが、検査に行っていない。時間の拘束がいやだし、面倒だ。検査は機械的に行われ、意味がないように感じたからでもある。原発事故後、一番つらかったのは、友人や知り合いが県外に避難したときだ。

#### キャリア教養学科 Cさん

自分の故郷がどうなっているかが気になり、両親に頼んで家に連れて行ってもらった。線量が高いので、1時間も居ることはできなかった。白い防護服を着て、震災後初めて行った我が家は、想像していた家とは似ても似つかないものだった。時計は2時46分で止まり、家はひどい状態だった。「これが現実」と母が言ったとき、涙が出た。「金目」とか「死の街」とか言う人に、こういう思いを伝えたい。

#### キャリア教養学科 Dさん

私は今、浪江町から避難して福島市にいるが、県内にも「避難している人はお金いっぱいもらっていいよね」などという人がいる。私たちは、お金で買えないものをたくさん浪江に捨ててきたのだ。福島市の人も、きれいな空気や環境を失ったのだ。福島をまるでゴミのように表現しながら、平気で電気を使っている人々に腹が立つ。お金さえあれば生活ができると考える人が許せない。そして、甲状腺やこれからの世代の健康が心配でたまらない。

#### キャリア教養学科 Eさん

震災後、母は食品に含まれた放射性物質の量を測る仕事を始めた。兄は大学でプルシアンブルーの研究を続けている。母や兄から話を聞き、生きていくために必要な知識を得ている。

#### キャリア教養学科 Fさん

震災直後、父が「原発が危ない」と言い、私たち兄弟に外に出ないようにと言った。私たちは言いつけを守り、家の中でもマスクをして暮らした。父は情報を集め、私たちに教えてくれた。放射線量が高い地域だったので、近所の子どもたちが外で遊んでいるのを見たときは、知識の大切さを痛感した。

#### キャリア教養学科 Gさん

震災後、高校に入学して陸上部のマネージャーになった。練習のとき、芝生には上がるなどと注意されていたが、雨に濡れながら競技場にいたこともあった。被ばく検査結果の数値が高かったとき、悔やんだ。

【今後の予定】

~~~~~  
【予告】第77回フォーラム 2014年10月31日（金）18:30～20:30

「ドイツと日本の電力改革～電力自由化、脱原発、再エネ～」

報告者：高瀬 雅男 氏（福島大学名誉教授）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第78回フォーラム 2014年11月6日（木）18:30～20:30

「田村市の被災状況と復興の課題」

報告者：冨塚 宥暲 氏（田村市長）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第79回フォーラム 2014年11月20日（木）18:30～20:30

「医療側から見える医療体制の崩壊～いわき市在住一麻酔科医からの報告～」

報告者：洪 浩彰 氏（いわき麻酔と痛みのクリニック院長）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第80回フォーラム 2014年12月2日（火）18:30～20:30

「福島の子供たちに寄り添いながら」

報告者：本多 環 氏（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター特任教授）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第81回フォーラム 2014年12月18日（木）18:30～20:30

「旧警戒区域復興への挑戦」

報告者：藤田 大 氏（株式会社鳥藤本店専務取締役）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第82回フォーラム 2014年12月26日（金）18:00～19:30

「未来を探す人々 ～拡大する原子力発電公害の中で～」

報告者：佐藤 政男 氏（元徳島文理大学教員・福島市在住）

会 場：福島市 キッチンガーデンビル2階 （終了後、ささやかな忘年会予定）  
~~~~~

【予告】第83回フォーラム 2015年1月15日（木）18:30～20:30

「新地町の被災の状況と復興の現段階」（仮題）

報告者：加藤 憲郎 氏（新地町長）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1  
~~~~~

【予告】第84回フォーラム 2015年1月29日（木）18:30～20:30

「食と農でつなぐ ～福島・女性農業者の取り組み～」

報告者：岩崎 由美子 氏（福島大学教授）

会 場：福島市アクティブシニアセンター「AOZ（アオウゼ）」大活動室1